

コロナ禍の給食の時間

学校給食は健康や成長のために栄養バランスを考えるだけでなく、子供の嗜好に合わせて、旬の食材をなるべく使用し食材の産地にも気を付けながら食材選びをしたり、また郷土料理や行事食から食文化に触れられるようにしたりと、様々なことを考えながら栄養教諭が献立を作成している。

コロナ禍の給食の時間では「黙食」が基本となり、食事中に会話を楽しむことができなくなった。会話を楽しむことができなくなったがために、給食の時間は楽しみではなくなった、何か物足りない、そのように感じる子供が多いのではないかと予想する。



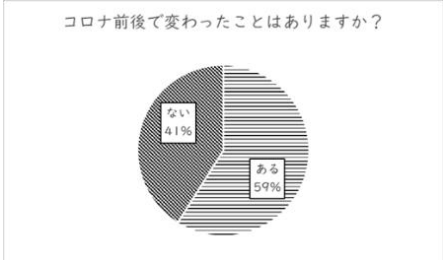
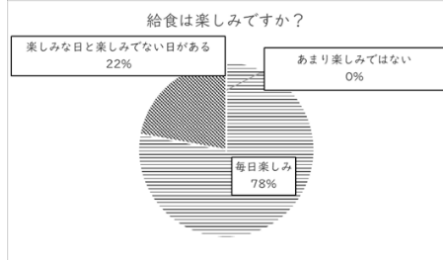
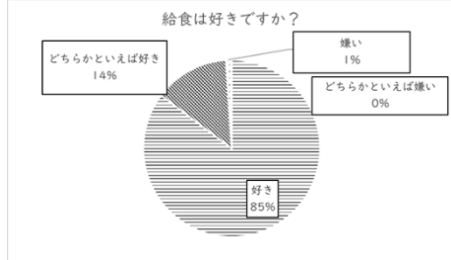
コロナ禍の給食の時間の指導

黙食中は味わうことに集中しているため、食材や料理等、食に対しての興味関心を高めることができる時間となっている。黙って配膳し、黙って給食を食べる時間を利用して、栄養教諭が子供の前で話をしなくても給食の時間の指導が進められるように、毎日、15枚程度のスライドを用意している。そのスライドを必要なときにどの学年でも見ることができるよう、学級担任とデータを共有している。

スライドでは、その日に使用する食材や料理についての歴史や豆知識を教えることだけでなく、生活科や社会科、国語科等、様々な教科と給食をつなげることも意識して作成している。なかでも給食が出来上がるまでの作業工程や調理員の工夫を紹介した動画は、子供の興味関心が高い。動画やスライドの内容から、献立の作り手である栄養教諭の思いだけでなく、調理員の思いに、コロナ前よりもふれることができるようになった。

給食の時間における子供の実態

3年生を対象に給食の時間についての簡単なアンケートを実施した。



どんなことが楽しみですか。	・おいしい食材を使っていて、味付けがとてもおいしいから楽しみ。 ・いろいろなメニューを知れる。 ・好きな給食が出るときは楽しみ。
どんなことが変わりましたか。いいこと、悪いこと、どちらもあれば書きましょう。	・会話ができないけれど静かだから、楽しめるようになった。 ・みんなが手を洗うようになった。 ・よく味わえるようになった。集中できるようになった。 ・みんなと感想を言えない。 ・友達から「おいしい！」という声を聞く機会がすごく減った。 ・寂しい。

給食が楽しみである理由は、コロナ前であれば「友達と食べながら会話をすることが楽しみ」と書く子供が多かったであろうが、「いろいろなメニューが知れる」や「いろいろな料理を味わえることが楽しみ」と、給食を味わうことへの楽しみについて答える子供が多くいた。また黙食の方が食事に集中できると答える子供も多くいる一方で、友達と話せない、感想を言い合えないことが寂しいと答える子供もいた。

給食を生かした食に関する指導

味について着目する時間が増えたことを生かし、その感想を子供同士で共有できるよう、給食のキャッチコピーを考える食に関する指導を学級担任と連携して行った。

栄養教諭からは給食の時間に、「五感を働かせて食べること」「舌には5つの味を感じるセンサー（味蕾）があること」等について指導を行った。普段何気なく食べている給食を、五感を意識して味わえるように資料を用意した。



栄養教諭の資料を授業に…

毎日の食事は生きていく上で欠かすことのできないもの。しかし、子供たちは毎日給食を食べることができるのは当たり前だと思っている現状。当たり前が当たり前ではないことを自覚し、感謝の気持ちや尊敬の心、今、生きていることの素晴らしさを子供たちが感じることで、これからの人生の糧にしてほしい。そのような学級担任の願いを、栄養教諭の愛情たっぷりのスライドは叶えてくれる。

1. 子供たちに「見えない世界」を写真や動画で見える化している。
2. 毎日目の前で食べているメニューに基づいた内容である。
3. 継続的に伝えてくれていることは徹底的に習慣化することができる。
4. 各学年の食と関連しそうな教材を把握し、適切な時期に情報が得られる。

毎日みんなで食べ、同じスライドを見て情報を受け取る子供たち…スライドをインプットの場に、授業をアウトプットの場にして活用する。食に関して共通の話題で子供たちが話することができることは、対話が生まれるチャンスである。だからこそ、授業に取り入れる価値がある。



写真1

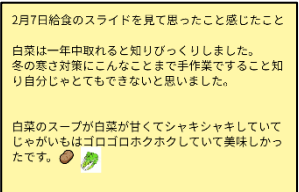


写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

実践1

給食への思いを感想へ

2学期から給食後、毎日その日の給食の感想を書いている。ねらいは「食」から考えを広げていくことである。「食」をきっかけに自分の視野を広げてほしい。日常に感謝できるようになってほしい。多様な考え方に触れ、受け止めることができるようになってほしい。様々な教師の思いを伝えることのできる絶好の機会である。また、月ごとに少しずつ感想のテーマを変えていくことで、子供たちは自分の成長を自覚化することもできている。(※写真1、2)

実践2

国語科につなげて

大好きな給食を「附小自慢の給食」と題して、新入生や給食を食べたことのない保護者に向けておいしさをキャッチコピーにして伝える授業を栄養教諭と連携して行った。その際、スライドを基に「五感」を意識して食べることができた。五感をオノマトペで表したり、同じ意味の言葉を並べてキャッチコピーにふさわしいものを吟味したりする姿が見られた。給食を食べることに目的意識をもつことで随分味わい方に変化がみられた。また、伝える相手意識をもったことにより、おいしさを伝えたいという思いから言葉を洗練していくことができた。(※写真3)

「すがたをかえる大豆」では、説明文を読み進めていく中で大豆が変身していくことに興味をもち、給食の献立表やスライドから「ダイズ」探しが始まった。そして、教科書に載っていない厚揚げやがんもどきについてスライドから学ぶことにより、自主勉強でさらに調べてくる子供たちもいた。その後、調べ学習ではそれぞれが一つ素材を決め、調べ学習をし、説明文を書いていった。その時には、給食のメニューを参考にしたり、いつも以上にスライドに情報がないか真剣に探したりする姿が見られた。出来上がった作品は図書室にかざり、そこから全校へ広げていくことができた。(※写真4)

実践3

理科の実験につなげて

給食の「五感を働かせて食べること」は実は生活に密接に関わっている。日々のスライドから学び、国語に生かすことを経験した子供たちは理科でも自然と五感を意識して実験を行う姿が見られた。

「日なたと日かげ」の単元において、子供たちはこの2つについて調べる時、まずは道具を使わず、自分の感じたことをまとめようということになった。「五感を使えば色々なことがわかる」という経験をしている子供たちだからこそ、このような考えに至ったのだと考えられる。

日なたと日かげを手で触ったり、においをかいでみたり、給食を食べる時以外にも大切にすることで見えてくるものがあるということに改めて気づくきっかけとなる授業を行うことができた。(※写真5)

実践4

特別の教科 道徳「この一食のために」

食事に関わる人々の苦労や工夫、愛情などを想像することで、たくさんの人々の支えによって自分たちの生活が成り立っていることに気づき、感謝の気持ちをもって日々を大切にすることを目標に授業を構成した。子供たちは当たり前のように給食が並ぶと思っている。給食が届くまでにはたくさんの人々の思いが込められていることに気付くためには、やはり立ち止まって考える必要がある。子供たちは料理を作ってくれる人は普段から目にしている。買い物にもついて行くことがあるので何となくその状況も理解はできる。また、命をいただくという考え方を知っている子もいる。しかし、なかなかそれらに連続性があることには気づけていない。今回授業の中で栄養教諭の仕事内容やその思いを語ってもらうことにより、新たな視点を持つことができた。また、身近な存在だからこそなんとなくやっていることは知っていたが、より深く知ることで給食とつなげて考えることができた。身近にいるからこそ、知りたいことや聞きたいことがすぐに聞けるような環境を学級担任と栄養教諭が作ることで子供たちは視野を広げて考えたり、日常生活とつなげたりすることができた。

栄養教諭と学級担任が連携することで、子供たちの生活に即した授業をすることができる。「人は財なり」手を取り合い、子供たちのために尽力することができる子供たちの成長は著しいと感じている。今後も継続し、子供たちが生きた学びをすることができるようにしていきたい。